

# 伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第35号 2004年8月

発行 日本口承文芸学会

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 古典文学第4研究室内

TEL/FAX 042-329-7246

## 船上の「宮本武蔵」

川島 秀一

高知県土佐清水市の西川恵与市翁(明治45年生まれ)から、カツオ漁についてうかがったときに、こんな話を聞いた。カツオ船の触先のことをヘノリカジと呼ばれるが、この場所に座ることができるのは、その船の中で、カツオ一本釣りの一番上手な者であったという。その者のことをヘノリと言い、そのカツオ船の看板として、他の船と争った。釣りの上手な人は、「宮本武蔵」や「佐々木小次郎」、「近藤勇」などの、あだ名があったという。

漁師たちは、剣豪のタトエを用いて、カツオ一本釣りの速さと、釣る姿の美しさを競ったわけである。宮崎県南郷町目井津の渡辺治美氏(昭和7年生まれ)によると、「日向の五丁ぎり」と言うのは、カツオを釣ってから後ろの甲板に落ちるまでのあいだに、宙に三匹のカツオが扇型に舞っている状態を指し、カツオを釣っている姿を横から見ると、釣り人の前後にある二匹のカツオを入れて、五匹のカツオが同時に見える様子のことを意味している。それは、キラキラと魚体が光りながら弧を描き続けている、すばらしいながめだったという。

漁師たちは、ことのほか講談が好きで、カツオ船の上でも披露するものがあった。たとえば、宮城県唐桑町の小松勝三郎翁(明治43年生まれ)によると、カツオ船の上で、港と漁場の往来にかかる退屈な時間に、船頭が若い者に講談本などを読んであげたという。講談本は『宮本武蔵』などが多く、節がいくらかあったが、力の入った読み方であった。船内の場所は、年高の者と年少者が集まるトモ(船尾)が主で、車座になって聞いたという。

また、鹿児島市の「南日本新聞」に連載された、枕崎のカツオ船の船頭、町頭幸内翁(明治32年生まれ)の回想録には、次のような記述がある。「緒方という人で、講談本や小説を船に持ちこみ、楽しそうに読みふけていた。なかなかの博識。幸内も“開演”が近づくと、オジドンたちがたむろしているトモ(船尾)の方へ、みんなと一緒に走っていった。「語らんか、オジドン」。いいころを見計らって、だれかが催促すると、緒方ジイは、得意の「巖流島の決闘」を語り始める。調子をつけて、興に乗ると、甲板を平手でたたきながら朗々とまくしたてることもあった。宮本武蔵が大好きであった幸内は、みんなより前に進み出て、熱心に聞いた。口永良部島は、上陸する浜と反対側の浜近くに温泉があり、そろって出かけたものである。岩ぶろの中でも緒方ジイは講談を披露、島の人たちも聞きはれていた」(「鯉群れを追って」10・1979.6.12)

おそらく、この枕崎船の「緒方ジイ」は、温泉では手に本を持たずに語ったものであろう。この地点からは、講談の口承化は、もう一歩である。日本中に「宮本武蔵」の名を広めたのは、俗説にあるように、一人吉川英治だけの業績ではない。その潜在的な読者を培っていた、漁船の、素人の講談師たちの力も大きかったことは否めない。彼らは、その講談本だけでなく、語りの芸やその内容も、浜々や遠方の島にも伝えたのであった。

(宮城県)

藤久 真菜

日本口承文芸学会第47回研究例会(2004年4月24日、國學院大学渋谷校舎にて)は、〈ボーダーを越えるシマウタ—奄美・沖縄・東京〉と題し、ラウンドテーブルのかたちでの企画となる。森田照史氏、山下聖子氏がシマウタの実演者として前に立ち、朝花節を始まりの声ならしとする。

奄美と沖縄それぞれの状況から、シマウタという用語や概念の拡大をみる酒井正子氏、レコードやラジオにのってシマを越えていくウタシャと、彼らのウタをとりこんで広がるシマウタを南部大島に考える島添貴美子氏、東京の島唄教室にアンケートを実施、参加者の奄美との関わりや教える上での個々の取り組みを追う末岡三穂子氏が、報告者に並ぶ。

報告の後、コメンテーター山本宏子氏が、奄美を出身とする人/自分でもシマウタをうたう人に対して、挙手をもとめる。前回例会につづいて、挙手を皮きりにフロアとのやりとりが始まり、奄美出身の方たちから活発な発言があいつぐ。「しまった(シマウタ、島唄、鳥歌…)」の表記をめぐる「自分たちはこっち(唄)に思い入れがある」「カタカナのシマをやめたくない」と述べられ、ウタシャにとつての「なちかしゃ」「なぐるしゃ」の違いという問いを受けて、森田氏は「私のとらえ方と研究している人たちのとらえ方との違い」にふれる。

テーブルを囲んで「現在何が起きているのか自由に語り合つて」(酒井氏)みると同時に、テーブルのまわりで今、何が起きているのかを考える。奄美を出身とし、シマウタをうたう自らを指し示しての「自分たち」「私」と、「研究している人たち」と、それぞれにボーダーをかかえる面々が一堂に会し、対話や応答をこころみてきたことに気づく。荻原真子氏より、シマウタに限らず口承文芸のさまざまな分野で起こっているボーダーレス化と、その仲介をする研究者の役割に話題がおよぶ。シマウタを入り口とした問題提起が、テーブルにつくひとりひとりのもとへとまわるところで、例会のおひらきを迎えた。(東京都)

内藤 浩誉

平成16年4月24日(土)、國學院大學にて、「ラウンドテーブル〈ボーダーを越えるシマウタ—奄美・沖縄・東京—〉」が酒井正子氏のコーディネート・司会によって開催された。コメンテーターに山本宏子氏を迎え、報告者として、酒井氏(「奄美の歌文化の動向と、90年代以降沖縄への『島唄』用語・概念の飛び火拡張」)に加え、島添貴美子氏(「元ちとせに至る南部大島のシマウタ伝統—そのメディア化と外部への広がり」)、末岡三穂子氏(「東京でシマウタを習う—島唄教室の現状とその担い手たち」)が担当された。更に後半、ゲスト・森田照史氏と姪の聖子さんの島唄演奏があり、学びとあそび一体の味わい深い会となった。

シマウタの中でも特に奄美を焦点に、「表現様式の独自性が強い」ため『島』というボーダーを越えることは殆どなかったが、2000年以降奄美出身者外にも愛好者が広がっている」現象を捉え、シマウタの現況、情報化社会に於ける影響と現代の伝承の在り方、現在のボーダーレス化に至る経過など、各々の現地調査に基づく示唆・報告がされた。90年代初期にヤマトのバンド「THE BOOM」が全国的なヒットを飛ばし、今や「島唄」は世界にも羽ばたく。一方で、生活に息づいた伝承・表現としての、島んちゅの情熱や力強さも見逃せない。討論では、シマウタの音変化・表現・表記からコンクールの影響にまで話題が及び、約百名中一割を数える奄美出身者の参加を得た会場は、盛り上がった。また、「糸くり節」「ヨイストラ節」など8曲の演奏は解説つきで、興味深く充実した時間となったが、最後の「六調」は会場を巻き込む踊りつきの演奏であったにも関わらず、共に席を立てて踊る参加者が意外に少なく、「研究者」と「演者」間に横たわるボーダーを感じずにはいられなかった。(神奈川県)

井上 綾子

緒方惟章氏は、夜明け方（＝暁）をめぐる男と女の葛藤を主題として、『万葉集』『古事記』『伊勢物語』中の歌謡を挙げ、話を進められた。それは、これら歌謡の場を従来の個人的贈答歌とするのではなく、多数の聴衆の前で披露された、宴座での即興的演劇であったとし、その三作品の歌における展開の様相をひもとくという意図をもったものであった。

氏はまず、『万葉集』107・108番歌、悲劇の皇子である大津皇子と石川郎女の恋の歌の問題で、石川郎女を貞淑で純情可憐な女としてではなく、老女として捉えた時に発生する擬似恋愛歌としての演劇性を指摘された。そして『古事記』の八千矛神と沼河比売との神語歌が『万葉集』の歌の先駆けとなるとし、「いしたふや 天馳使 事の 語言も是をば」を囃子詞と位置付け、「天馳使」は当時のプロフェッショナルな語部であり、その文体・会話の展開の巧みさはそれが古代演劇空間の中で行われていたことを表している。更に一夜目の訪問の際の両者の葛藤の中で沼河比売が拒絶せざるを得なかった理由を、女性＝神の嫁であるためにすぐには男を受け入れられない〈呑み妻〉のパターンを踏んでいる所以であると述べられた。

『伊勢物語』14段も前述の二作品の流れをひいた「昔男」と「みちのくの女」の暁をめぐる物語であったと示し、このような主題をもとにした口承世界の語りの場については今後更に考察していくべきものと会場に投げかける形でまとめられた。

緒方氏の講演は、文字によりながら、文字以前の表現を見せる『古事記』の語りの場の問題を中心として、暁をめぐる男と女の心の葛藤を〈呑み妻〉という様式化された話型が存在したことによって時を越えて伝えられてきたのだと示された点に大きな知的刺激を受けるものがあつた。

(千葉県)

青木 美樹

近年「声に出して読みたい日本語」(齊藤孝、草思社2001)がベストセラーになった。兵藤氏は講演の冒頭、この本に対する口承文藝學會からのコメントはないのだろうか、という疑問を示した。

この本に代表されるように、今現在、古典や口承文芸を声に出して読むことは、世代や時代を超え、「日本人」の原基である「日本語」へと自己同一化<sup>アイデンティファイ</sup>することであり、物語の向こうに作者を超えた「日本人」という観念を見ようとする行為である。この行為は、明治期以降に近代ヨーロッパの方法から取り入れられた読み方であり、柳田國男が捜し求めた口承文芸の作者(＝日本人の国民精神)を現前させる装置として働く。

しかし一方で、平安時代の物語の場合、語られる「物」(記憶)は「作者」には依存しないと考えられていた。平家物語の冒頭は「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。」と始まる。学校で平家を習ったものならば、諳んじることができであろうこの部分には、語り手が語り手ではなくなる(清盛に憑依される)ための仕掛けがあると兵藤氏は指摘する。つまり「物」(記憶)は語り手には依存せずに、「物」(記憶)が「物」(記憶)のままに語るのだという。源氏物語は語る主体が多様化し、ころころと入れ替わる。このことも、語りの場に居合わせた主体が次々に語ると考えたならば、決して不自然なことではない。

物語を声に出して読むことで、日本人の心を求めるのか、語ることで受け継がれてきた記憶を引き継いでいくのか、読むこと・語ることの持つ意味を考えさせられる講演であつた。

今、学校図書館には、読み聞かせボランティアが派遣され、各地で語ることを主体とした「民話の会」の活動が盛んになっている。これから先、物語をどう読み語るのか、語るという行為に対して研究者も無関心ではられないようである。

(千葉県)

廣田 収

全く違う専門領域から、素朴な疑問を記すことにしたい。  
的外れの批判はどうか御許しいただきたい。

中村美紗氏は、ジョン万次郎の伝記をめぐって、聞き取り・記憶・日本語方言と翻訳の問題などを整理しようとした。これに対して、緒方惟章氏は、外国語の受容に漢語が基盤となっていると指摘された。また、野村純一氏は、個別の事例に埋没せず早く原理的なものを探すべきだ、と助言された。この発表について会場は概ね好意的で、今後可能性のある研究として評価が高かった。

許玩鍾氏は、韓国の徐福伝説について、遺跡調査も交え、蓬萊山のイメージを探った。残念なことに、発表の内容がいささか散漫で、明確な結論が示されなかった。また、伝説を事実に戻元しようとする傾向が見られた。遠志保氏から、韓国で現在この伝説は増加しつつあるのかという質問があった。韓・日の比較を行なうためにはまず、許氏が韓国における伝説の本文を資料として提示されるべきだろう。

本田優子氏は、アイヌ口承文芸における衣服について、主人公との間に強い連関と意味のあることを指摘された。私も含めて会場全体が内容にあまり踏み込まず、中川裕氏の他には質問が出にくかった。本田氏が、分析の対象とされた物語本文を資料として示して下さると、より深い理解が得られたであろう。

間宮史子氏は、グリム童話集と選集を対象として、グリム1版からテキストの変遷を詳しく調査され、傾向とともに異同のあることについて論じられた。惜しむらくは、版ごとの表現上の比較が具体的に例示されればなお良かったであろうし、初版のもつ意義をどう考えるか、が明確に理解できなかったので、加筆改変の意味が十分に伝わらなかったことが残念である。

拝察するに、口承文芸学会は総合学会の性格を持つので、専門外の会員にも分かりやすく発表されれば、議論はより活発に行われるに違いない。  
(大阪府)

丸山 顯徳

第二会場の発表は3名であった。藤久真菜「田畑での『口かけ合い』」は、福島県岩瀬郡天栄村の星絹江から聴取したムカシの語りだしが、畑での雀とじさまのやり取りに始まる。昔話集には、雀、狸、猿、狐などが田畑で仕事に勤しむ爺婆の元へ来て囃したり掛け合ったりする場面がある。これを田遊びとの関係からその背景を想定した。意見としては、語り手と聞き手の両方の関係から捉えられること、昔話の導入における歌やリズムとの関連、三河の花祭りのような悪口芸能との関係などの指摘があった。なお、タイトルの「口かけ合い」という述語がどれだけ熟した言葉であるかという疑問が提起された。

次に久保華誉「日本における『豆と炭と藁』」は、グリム童話にもある。日本では宮崎から青森まで傳承されている。グリム童話は明治20年代に初めて翻訳され明治に7種類の訳で8回出版されている。巖谷小波などの口演童話や修身の教材として利用された。全国に翻案されて広がったのは、富山の売薬人の影響がある。詳細な一覧表を作成して発表された。この一覧表に記載された80話のうち約半数が新潟県である。水沢氏の調査によるが口演童話の影響という見解。フロアーからは、一覧表の詳細な分析がほしいという意見があった。樋口淳「語りの記録とマルチメディア」は、2000年度から始めたデータベースの公開の為のテープの資料保存に関する報告。劣化するテープ資料をいかに保存するか。デジタル化の実際を紹介した。フロアーから協力希望者があり、その際の著作権は、語り手と聞き手の両方にあり、語り手が亡くなった場合には遺族が受け継ぐ。またデータの保管場所や利用に関する詳細な決まりも紹介された。  
(奈良県)

## —ウタ・タトエ・命名— 報告①

佐藤 太二

本シンポジウムはまず司会の小池淳一氏による口承文芸の現在性を問いかける言葉から始まった。これは、口承文芸とは過去の文芸ではなく今現在も「発生」し「創造」され続けているのだという考え方に基づくもの。大林太良氏の、従来の口承文芸は終わったという発言にも関わってくる問題である。パネラーの三者はその小池氏の言葉を受けてそれぞれの立場から口承文芸の「発生」と「創造」について述べた。

民謡研究の立場から述べた長野隆之氏は「ウタの現在と研究の将来」として、民謡の概念を、歌い手と聴き手の関係の中で生まれる「場」と切り離せないものと規定した。

続く川島秀一氏は「タトエ話の伝承世界—宮城県気仙沼地方の事例から—」と題して、現在の生活の中に「タトエ話」が生きているということについて具体例を挙げて報告した。

山田巖子氏は「目の想像力／耳の想像力—語彙研究の可能性—」として怪異研究を題材に怪異を命名することの意味について述べた。

三者の発表の後、小池氏の提案により口承文芸の「発生」と「創造」につながる、「場」の問題について三者に意見を述べてもらうことになった。だが、三者の言うところの「場」が共通概念ではないために、なかなか議論が噛み合わない。

その一方でフロアからは、「調査では物語の場で話を聞くのではなく、場の物語を聞いている」という意見も出され、「場」の問題から語り手論や調査書記述の方法論にまでも議論の広がりを見せた。

時間的な制限もあり、「場」の問題から「発生」と「創造」というところまで議論を戻すことは適わなかったが、口承文芸の現在を考える上での大きなきっかけになったと思う。その意味で、質疑応答も活発に行き交う充実したシンポジウムであった。

(東京都)

美濃部京子

この学会でしばしば話題にされるのが「口承文芸の衰退」「人類文化史における役割の終了」といったようなテーマです。確かに、昔話の生きた伝承はほとんど聞かれなくなってきていますし、これからの口承文芸研究は、今までのように伝承の語り手を発掘し、話を集めるという方向では動きがとれなくなってきているのが現状です。そうした中で、新しい21世紀の口承文芸研究の方向性を探るという意味で、今回のシンポジウムは開かれました。

口承文芸の「発生」と「創造」という視点から、「ウタ(民謡)の現在と研究の将来」(長野隆之氏)「タトエ話の伝承世界」(川島秀一氏)、「目の想像力／耳の想像力—語彙研究の可能性—(怪異現象に見られる名づけの問題)」(山田巖子氏)という三者三様の立場から、新しい話が生まれる可能性のある場をめぐる事例が発表されました。

ここで感じられたのは、これからの口承文芸研究は今までに集められた話を分析するだけでなく、これから新しい話が生まれる可能性がある「場」をも対象としていかなければいけないということです。今までに収集された話だけを対象とするのであれば、たとえそれがいかに生きている伝承であったとしても、いずれは記録媒体にのみ残された「死んだ伝承」になってしまいます。口承文芸研究が常に「生きた伝承」を対象にしようと思えば、これから話が生まれる可能性のある場にも目を向けていかなければならないということです。今の時代に生きている伝承は現代伝説(世間話)だけではなく、それ以外の可能性もあることに気付かせてくれた有意義なシンポジウムだったと思います。伝承だけでなくその周辺にもアンテナを張っておく必要がありそうですね。

(静岡県)

竹原 威滋

国際口承文芸学会 (International Society for Folk Narrative Research) は、1958年に設立されて以来、ほぼ4年毎に大会を開催している。会員は世界の説話学者が参加している。日本からは、関敬吾、臼田甚五郎、荒木博之、小澤俊夫、三宅忠明の諸氏など日本口承文芸学会創立当時のメンバーはじめ現在十数名が会員として参加している。日本口承文芸学会の30周年を控え、外国の説話学者との交流を深め、国際シンポジウム等を開催する環境を整える契機となれば幸いである。来年には第14回大会がエストニアのタルトゥ市で開催される。多くの会員のご参加を!

■日時 2005年7月26日(火)～31日(日)

■場所 エストニアのタルトゥ市 Tartu/Estonia  
バルト3国の一つ、かつてのハンザ同盟都市、  
今年ヨーロッパ連合に加盟。  
首都タリンに続く第二の都市、人口約10万人。

■総合テーマ 口承文芸の諸理論と現代の諸事例

Folk Narrative Theories and Contemporary Practices

■主要プログラム

- ・ 開会レセプション
- ・ シンポジウム
- ・ 全体発表、分科会発表
- ・ ポスター発表
- ・ 書籍/調査報告書/定期刊行物の展示
- ・ 語りの夕べ (エストニアの民間芸能の上演)
- ・ 観光小旅行/晩餐会 (同伴者も参加可) etc.

★研究発表 (言語: 英/独/仏/露) 質疑含め30分

★エントリー締切: 2004年10月1日

★発表要旨の送付締切: 2005年4月15日

詳しくは、下記の大会サイトを参照のこと

<http://www.folklore.ee/isfnr/>

★前回のメルボルン大会については高橋吉文氏が『口承文芸研究』第25号に報告されている。

★その他問い合わせは下記の竹原までどうぞ!

E-Mail: [takehat@nara.edu.ac.jp](mailto:takehat@nara.edu.ac.jp) Tel: 0743-78-7391

Homepage: <http://mailsv.nara.edu.ac.jp/~takehat/>

(奈良県)



\* 寄贈の雑誌・図書は次号に掲載する予定。

《「伝え」編集委員会からのご連絡》

1. 締め切り日が過ぎても、執筆予定者から数編の原稿が届きませんでした。発行日の都合もあり割愛することにしました。ご了承ください。
2. 「伝え」第36号・「各地からの報告」の原稿を募集します。執筆を希望される方は事務局・編集委員会 (米屋) にお問い合わせください (9月締め切り)。